

尾高山外、下堅田村底によつて四百八十町歩に  
移と松が三十二万株。太平は床木青字園員によつ  
て日田松、赤松が三反步に四千八百本植林されて  
います。その規模には大々の相違がありますが、いずれ  
も一致快力して事は当左へている点は、實に見事  
なものであります。感歎するばかりです。

(3) 今後も農業・林業・水産業・畜産業など構造  
改善に、この精神を生かして行きたいものです。

秋になると、木の葉が落ち、それは雨風にさらされ、  
土の中に落ち何万、何億という種類の微生物の作用分解  
されて、植物を育てる肥料源となります。植物はこれき  
吸って、葉を茂らせ、幹を太らせます。  
森林の中には、根や葉や幹を食べる昆虫が住み、さらには  
昆虫を捕えたり、木の実を食べ有害、無害のいろいろ  
な野鳥や動物が住んでいます。  
森林は、微生物、虫、鳥、動物たちの共同社会で、太  
陽と水のぬぐみを受けながら、自然の調和を保っています。  
(おわり)

筆者たる筆者ではない、よく人に愛されるといふ。平田幸一氏は、夢想家  
こと、井上種次郎氏からは矢野龍溪への譲り受け、山中民成山名勝氏と共に  
田舎主毛利家と佐伯について、そして学校教育の活用につき、重慶寺等  
や鶴谷彦輔のこと――末年へ数え百歳になられた山名先生の独活場で  
ある。董一郎氏が佐伯の画家や書家が詠つれ、高遠景物がうらやま  
京や大阪で好んでいた人達のことから、聽集からも、古く不販問  
かれて、詠はつかなかつた。樂しく古文と詩を聞けた平田が書いた。

### 研究

佐伯の港はどんな働きをしてい乃り

| 主として木材の流通について |

大分県立佐伯農業高等学校  
教諭・同校郷土誌クラブ顧問

本会会員 市野 稲

仁

### 第二章 佐伯港

#### 第一節 佐伯港の自然的環境

##### (序説)

潮流は於て日間示してハ否ように「満潮時の港外は  
西上浦と高松を陸橋とし、約十分間で流れ、荒綱代と八  
島間を約一時間で流れ、港内に近づくに従つて潮流は  
しだいに弱まる。港湾内の潮流は方長潮、落潮共に十五  
分である。港湾外の落潮時は西上浦、高松を結ぶ間を斜  
角航行に流速地點共に支障なし。」  
海流に於て日間の如く高潮の分流があり、旋回流も少

### 話題

佐伯の歴史と文化を語る会へ概況

時日 “十一月廿日（金）午後二時

場所 “佐伯市役所三階大会議室

主催 “佐伯市教育委員会・佐伯史談会（其誰）

六人の長老の方々をお迎えして、かづく佐伯の歴史や、地中で地方文化  
の高揚に貢献された人々のこと、又は忘却せざる出来事などをお話を聞  
いた、幸い天気も回復し聴衆も三千数名の出席を収めました。

之に毎度より、奮進を勧め政治の人々とお話を語りました。卓話者、武人、

海流に於て日間の如く高潮の分流があり、旋回流も少

るゝで、佐伯地方の気候が温暖の一原因ともなつてゐる。

(第二回)

潮流圖



## 六、気候

下の統計が示すように、表日本式気候で、大分県の気候区によれば南海氣候に属する。従つて高温多雨で、特に降水日数が多くあり、降水量が多いことは注目すべきことである。黒島のビ

ー樹や蒲江のサンゴ礁など、亞熱帯性の北限で当たること云われることも、白井がうらに詫問に通勤していふ人々が、シヤツ一枚違うと言つてゐることなど、佐伯地方の暖かさ実感で示していふ言葉である。冬降雪日数は

### 佐伯の気温と雨量

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年
気温	6.0	6.6	9.5	14.4	18.4	22.0	26.1	26.8	23.9	18.2	13.3	8.4	16.1
雨量	43.3	88.8	113.6	154.2	169.8	261.3	285.2	249.5	300.1	149.1	22.1	48.8	1478.8
降水日数	6	7	10	11	10	16	12	10	12	9	8	7	118

冬の気温 7度前後

夏の暑く、冬は寒い  
日中夜温 30.8度

平均26.3度 年平均暖かい 高温多湿  
日中温度差 9.0度

(大分県小地理による)

三日程度で身のことその特徴がうががえる。  
雨量の点で市役所の課長さんは次のように話をしてくれた。「一日豊原を敷設する時に、渠南へ多雨と河川の性質を十分調査しなりで、大分地方に基準を取つたため、八幡地区では鉄橋と水道は寸札すれになり、洪水の場合は大へんな惨状を呈する。時に最近豊原山の開墾が多くなつて、雨が降りはじめて短時間で下流は洪水となる傾向が益々ひどくなつた。昭和四十一年には時雨雨量にして三日、三十六年から四十年は最高八十九ミリが六回を見た」という。

台風はこの地方をよく通過し、東南から北西に斜めに対する場合や、西回旋を北上する場合に九州でも最多雨地帯となる。反面冬の季節風に於いては北西の風は九州山脈に当たり、熊本県方面に雨や雪を降らし、佐伯地方に及ブエーン現象で鞍馬地帯に入り、豊後水道を渡つて再び遙風を持つて四国に上陸する左から佐伯地方の天気予報は四国への愛媛県の気象現象とも必ずしも一致せず、予報が立てにくいくらいである。とくに北東へ北ガチカ風は港にはほとんど直角に吹きつけるので、大型の船舶以十分警戒を必要とする。

冬の西風は海上ではかなり吹くが、九州西岸の島原方面とは問題はない。西鉄の球場が冬明けの練習に、鳥原ではそうそく引上げて平和台に帰るにそろべて、佐伯球場に於いては、合格の判定をうけ左といふ。佐伯港を中心とする風雨は、台風を除いて、欠航せぬほかないことは年中ないといつてもよい。

以上のように自然的条件に恵まれてか、佐伯へ業者や商人よく聞かされた言葉は、天然の良好という声が多い。

私達は社團の統計資料を基にして判断しているつもりで、  
あるが、佐伯の人々話で良、どうもお國自慢、異へかし  
て実感が薄らないといいため、船にてお出で、お出でして  
犬を歩けば橋に当たるとて走り去るが、私を満足させて

くれた二つの話しかおきた。  
「一つは、長い夏休みも終らずとすれ八月三十七日お出  
来事である。前日カニ才八日カノタ方、漆とぶらついてい  
た私は、税關ノ役人から、朝日午後一時、右闘沖に碇泊  
中ノ紀洋丸（一五三トン、太平洋運輸株式会社、佐伯）に案内す  
るがどうかと促がされた。早速同僚と生徒ときそい、九  
人で約束ハニナセ日午後一時、税關ノ小船から本船にて  
びき、高いタラップを踏んで乗りこんだ」一等航海士と  
税關ノ役人と中心に、私達は船長室のテーブルを囲んだ。  
私がトライはまだ、オレンジシエースは、や、間をお  
いてメロシと一人一人の前に置いた。一等航海士は、今  
アメリカでさかイヌメロンで十、どうぞも上り下さいと  
すすめ、私達に質問を要求した。

「佐伯ハ港の特徴は何ですか」と私が聞いた。  
「よい港です。いつも波静かで、波浪の弱者と云ふは作  
業は困難です」と一等航海士は答えた。  
「軍が手に入れたもの無理はないですよ。ホントドいい  
港です」。少文才まう下税關吏が云った。  
「左の左の返答であつたが、二人の顔と言葉から、  
私は非常な重みを持てて聞こえた。

今一つは、九月十三日土曜日、港にある検疫部を訪問  
し、左隣、二人の係官に同じ質問を發した。係官は  
「波静かでよい港です。私は過去五年勤務地を勤めま  
したが、こんな静かな港は初めてです、とくに冬波が高  
くて仕事ができにくかったのですが、今まで一回も検疫院  
に立ちました。波が荒れて困ったことは古りません」と、もう

一人の係官も何回となく肯づいていた。鶴見半島の米端  
ノ島あの方島と蒲戸の岬ノ外にむかひ、お出で紹介に行き  
る大型船が風よけ、波よけに碇泊してゐることもあらず  
いふ話を聞いた。

波浪が少く作業がしやすいこと。港が広く深く十米  
以上もあるので、大型船が心配なく簡単に出入りできる  
こと。干溝の差分小さく、そして、小船でも大型船でも接岸  
や繋留、進水に便利が良いこと。  
佐伯の港が天然の良港であると自己共に許すことが出  
来るとは、主として右の條件がそろつてゐるからである。  
以上

採訪記

國東半島に佛教文化を訪ねて

—バヌによる秋の観世研修の旅の記録—

幹事 羽柴 雅弘  
副幹事 吉田 雅雄

十一月三日、文化ノ日。荒に一、左天候も遅れ時刻  
年前七時佐伯駅前を出発したバヌは、次々と今日の参加  
者をみて國道十号線に沿る。一行四十九名会員外が三  
分の一、婦人九十数名、大型ノバスクノビ身体才樂で身  
カラ、大分、別府を経て午前七時半立石着、そこで伊東、  
大岩西氏に迎えられ、その御案外とい左左にて、馬上八  
時社の境内に在る諸方惟榮を祀る石ノ祠にまいり。  
諸方惟榮は佐伯氏の祖考、上州沼田ノ源流を解かれ  
佐伯ノ婦々途中、馬上に急死せば左と伝えられた悲運入  
人。その最初の地點の伝承などは西氏にお話を聞く。鳥  
上八幡社及社殿も大きく境内も広く、なごみ老木等と古